

生活指導の取り組みと音について

～卒業後の生活を見据えて～

伊藤海・木村美津子

本校寄宿舎では全国各地から集まった多様な年齢の舎生が生活している。舎生が持つ豊かな人間性を更に伸ばす活動の一環として、ものの見方や考え方を広げ、年齢に応じた自立のための力を身につける取り組みを「生活指導」の領域で行っている。その中で、「音」というものをテーマとして扱い、一概に定義することが難しい「音」に関する事柄を舎生に知ってもらうための働きかけを行っている。ここではその取り組みについて報告する。

キー・ワード：生活指導 自立した生活 「音」に関するマナー

1 はじめに

本校寄宿舎に在籍している舎生の帰省先は全国にまたがり、かつ土・日曜日も部活動等でほとんどの舎生は帰省できないため、寄宿舎は長期休業期間以外、常時開舎している。従って基本的な生活指導と共に、舎生への精神面のフォローや保護者への緊密な連絡、舎生が病気やケガをした時の保護者代わりの対応、余暇指導等について配慮している。

また、寄宿舎生の中には卒業後も親元を離れ進学もしくは就職のため一人暮らしをし、自立した生活を送る人も多い。そこで社会生活を円滑に営むための知識・力・行動が定着するような働きかけを「生活指導」の領域で行っている。

昭和 48 年度から専攻科生の入舎が始まった。それまでは同じ敷地にある「川本寮」で生活していた。

昭和 54 年度よりしばらくの間、専攻科生が 0 名となっていたが、昭和 59 年度から徐々に増えていったため、専攻科生窓口係を設けることにした。それは、専攻科生に対する生活指導も含めたものだった。

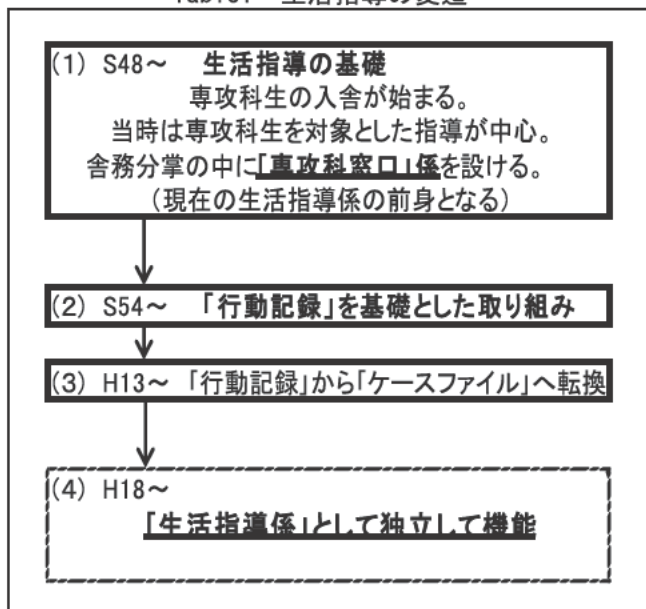
昭和 54 年度の 3 学期からは、生活場面における望ましい行動を項目としてチェックする方法として「行動記録」をつけた。この行動記録は、基本的な生活・健康安全・経済生活・学習生活・余暇利用・言語生活・社会適応の 7 つの領域にしたものである。

平成 12 年度には、舎生の状況や環境も大きく変化してきたことから、年に一回の行動記録の記入と特記事項の検討だけでは指導に生かすことが困難となり、次の方法を検討した。

平成 13 年度から「行動記録」を廃止し、舎生一人ひとりの行動、考え方等を指導員から定期的に情報を収集し、指導・援助の方策を検討する「ケースファイル」の方法をとった。ケースファイルで取り扱う領域は、基本的な生活・経済生活・自己実現・人間関係・社会的関心の 5 つに絞った。記入形式も「行動記録」のチェック方式から所見をコメント形式で書く方式に変えた。そして、寄宿舎部会でケースファイルを取り扱い、「指導員それぞれの目線で舎生一人ひとりの姿を見ることで、舎生の違う一面を引き出し、指導員の共通理解を図っていく」また、「寄宿舎部会で舎生の日常の様子を報告することで、舎生に対する指導員の働きかけを確認する」という 2 つを大きな目的として取り組んだ。このことは担当指導員が見えなかった舎生の一面を知るよい機会に

2 本校寄宿舎の生活指導の変遷

Table1 生活指導の変遷



もなった。

平成 16 年度に、寄宿舍個別指導計画を試行するにあたり、「ケースファイル」を廃止し、ちょこっとノートを使って舎生の様子について情報交換を行うことにした。

平成 18 年度からは、生活指導として、舎生の生活全般に対し、指導計画を立て、推進した。また舎生の様子に対応した生活指導を中心に行うようになった。

3 生活指導のねらい

生活指導においては、以下の 2 点を念頭において指導にあたっている。

- (1) 舎生の社会自立に向けて、多種多様な場面を想定してどのようにアプローチしていったらよいか考える。
- (2) 聴覚障害という自分の障害を認識し、どのように周りに伝えていくか考える。

生活指導は寄宿舍指導員による担当舎生に対する個別の指導を基本としている。また、卒業後、社会の様々な場面に適応するために必要な習慣、態度、技能を身につけさせることを目的とした一斉指導や担当毎のグループ指導を生活指導係が中心となり年間を通じて計画している。

一斉指導で行う生活指導は、主に以下の取り組みを活動の柱としている (Table2)。

Table2 一斉指導の取り組み

① 寄宿舍オリエンテーション

新入舎生が寄宿舍生活をスムーズに始められるように、寄宿舍の日課や過ごし方を説明する。

② 帰省についての説明

帰省方法の計画や帰省途中に何らかのトラブルに遭遇したときにどうしたらよいかを考えさせる。

③ ケータイ・スマホ教室

携帯電話使用によるトラブルや犯罪に巻き込まれないために、必要なルールとマナー、正しく使用するための知識を身につけさせる。

④ 通院について

軽度な傷病の時に一人で通院できるように必要なことや医師への伝え方などを考える。

⑤ 寄宿舍 OB の話を聞く会

寄宿舍の OB の方のお話を聞くことで、卒業後のことを考え、寄宿舍での生活を顧みる。

⑥ 退舎説明会(一人暮らしに向けた話)

卒業年度の舎生が、退舎後の一人暮らしや社会自立に向けて学ぶ。

4 「音のマナーについて」の取り組み

⑥の退舎説明会において「一人暮らしをするにあたって」をテーマに行う際に「音のマナーについて」の指導の時間を設けているが、卒業間近になってから音のマナーを取り上げるだけでなく、もっと早くから意識を持つことは大切だと考え、平成 28 年度からは退舎生だけでなく舎生全員を対象として行うことにした。

(1) 設定理由

- ① ろう学校を卒業後、聞こえる人と過ごす中で、「音」について驚くことがあった。これは在舎中に知っておいた方がいいこともある。
- ② きこえない立場からすると生活音などを単に「うるさい」と指摘されても、自分が出した「音」は周りにどのようにきこえるのかを掴み感じるのが難しいため、「音」のきこえ方や「音」が周囲に与える影響などについて知る機会が大切になってくる。

本校寄宿舍のろう指導員の経験も踏まえて、この 2 点を設定した。

また、きこえる立場としてもまずは舎生が「音」というものをどのように認識しているのか、またどのような「音」に対して関心を寄せているのかを知ることによって指導に生かしたいと考えた。

しかし、きこえる立場・きこえない立場に関わらず、どんな音がうるさい・気になると感じるかは、個人の考え方や価値観、生育環境などの様々な要因によって左右され、一概に定義づけることが難し

いデリケートな問題であることから、まずは舎生が「音」に対して関心を持つことができる機会を設けることを目的とした。

(2) 舎生の実態

寄宿舎には、これまで在学していた学校や家庭環境、人工内耳装用の有無など様々な舎生が集まっている。

平成 29 年度在舎生 42 名の内、	
ろう学校のみ在学経験者	25 名
難聴学級を含む一般校のみ在学経験者	7 名
両方の在学経験者(小学部以上)	10 名
デフファミリー	5 名
人工内耳装用者	11 名

(3) 指導のねらい

①「音」について関心を持つ

きこえる人には「音」がどのようにきこえるのか、周りにはどんな「音」があふれているのかを知る。

②自分が出している「音」を意識する。

どんな「音」がするのかを知ることで、場面に応じた行動や考え方を意識する。

(4) 指導の流れ

男女子寮ごとに分かれ、舎生が日頃感じている「音」に対する疑問についての話し合いを通じてお互いの考えを知るきっかけにもなると考え、座談会形式で行った。

- ①実際に本校卒業生であるろう指導員が自らの音にまつわる経験や失敗談などのエピソードを話す。
- ②ろう指導員からきこえる指導員に対して、「音」に関する質問をし、それに対してきこえる指導員が答えるというやりとりを行う。

このやりとりを舎生にみてもらうことで、各々が「こういう風にきこえるのか」「音で失敗しているのは自分だけじゃないんだ」「こういう時にはこうすればいいんだな」と考えることができるように考えた。

(5) 指導にあたっての留意点

舎生から活発な意見や質問を出しやすい雰囲気作りに配慮した。

また、きこえる立場から一方的な話をするのではなく、「音」というものを、きこえる立場・きこえない立場の双方がどのように捉えているのかをざっくばらんに話し合うという点に重きを置いた。なおかつ、きこえる立場の考えを話し合いの軸とするのではなく、きこえない子どもたちの考えを尊重しながら、舎生と目線を同じくして物事を考えるように心掛けた。

5 話し合いの様子

(1) 平成 28 年度の取り組み

最初に、ろう指導員が「食事の音や映画館等の静かな場所で気になる音は何か？」といったように舎生に知ってもらいたい「音」を切り出したことで、舎生も「音」はこんなふうに聞こえるの？この場合はどうしたらよいか？と積極的に質問が多く出た (Table3, Table4)。特に寄宿舎や住居で生活する上で出る音についての質問が多かった。

自分たちの行動はどのような受け止め方をされているのかなど、日常の行動を顧みてどのようにすれば音の大きさを抑えられるのかを話し合うような場面もみられた。

Table3 指導員同士でのやりとりの一部

ろう指導員の質問 ←→ きこえる指導員の回答

Q1. 食事の時に音はどのようなものがあるのか？

A. 口を開けたまま噛んでいると「クチャクチャ」という音がきこえる。口を閉じて噛み、飲み込むまではしゃべらないようにすれば音は抑えられると思う。

Q2. 足音がうるさいと注意されたことがある。

足音はどのようなものなのか？また音を抑えるにはどうすればいいのか？

A. どんな靴を履いているかによって鳴る音の種類や大きさも異なる。例えばサンダルだったら「ペタペタ」、革靴だったら「ゴツゴツ」など。地面につく時の足の力を抜けば音は小さくなると思う。

Q3. 映画館でカップの飲み物をストローで飲んでいて、最後に「ズズズ」とすする音が出てしまうが、この音を出さないような工夫はあるか？

A. カップの中の飲み物の量が少なくなってきたなと思ったら、ストローを使わずにフタを開けて飲むようにすれば音は出ないと思う。

Table4 舎生から出た質問 (H28 一部抜粋)

舎生の質問 \longleftrightarrow きこえる指導員の回答

Q1. 手話で、手を合わせたりした時に出るパンッという音(「方法」や「友達」など)は気になる？

A. こちらは手話をいつも使っているから気にならないが、外出先や静かな場所では周りの人から驚かれるかも知れないね。

Q2. 寄宿舎の階段を歩いている時の音は大きく響いている？

A. 寄宿舎の階段は音が響きやすい造りなので、ある程度の音は仕方無いと思うが、走らずゆっくり歩けば大きな音は鳴らないと思う。

Q3. 隣の部屋の壁に物がぶつかった時の振動や音を感じることがあるが、きこえる人もこれは気になるもの？

A. 隣の部屋からの騒音や振動は気になる時がある。これが原因で隣人トラブルや事件に発展することもあるので注意が必要。

(2)平成 29 年度の取り組み

平成 29 年度と同様の形式で行った (Table5)。

Table5 舎生から出た質問 (H29 一部抜粋)

舎生の質問 \longleftrightarrow きこえる指導員の回答

Q1. 難聴の友達からイヤホンの音漏れがうるさいと言われたことがある。どのくらいの音がどれくらいの距離まできこえるのか？

A. 今のイヤホンは性能が良いのでよほど大きな音でなければ音漏れはしないと思う。君たちの部屋に行ったときでも音漏れが気になったことはあまり無い。

Q2. 小・中学生の頃、学校のトイレで用を足している時の音が周りに聞こえてしまって恥ずかしかった経験がある。こんな時はどうすれば？

A. 用を足すと同時に水を流せば音が紛れる。

生活音は誰もが発する音だからね。これは場面に応じて行ったらよいと思う。

Q3. きこえる人が耳栓や補聴器を付けたときにはどのようなきこえ方になるのか？

A. 耳栓をすると、水の中に潜った時のようなこもった音のきこえ方になる。補聴器は人によって調整が違うのできこえ方は異なる。

Q4. 携帯電話はマナーモードにしても周りに音がきこえるのか？

A. 普段はあまりきこえないが、映画館・病院・図書館など周りが静かな場所ではきこえる。

話し合いを通して、男女ともにトイレやお腹が鳴った音など生理現象として出る音やイヤホンを使用している時の音漏れに対する質問があった。

また、舎生の中には、漫画などに出てくる、ドアを勢よく閉めた時の「バンッ！」という音や、物を強く置いた時の「ガチャン！」という音などの擬音語を目にして、「音」というものを感覚的に学んだ

経験があるという、興味深い発言もあった。

このことから、これらのことに関心を示しながら生活をしている舎生が多いということが分かった。

(3) 話し合いのまとめ

「音」とはどのようなものか、相手の気持ちにどのような影響を与えるのかを知ること、「きこえる人同士」「きこえない人同士」「きこえる人ときこえない人同士」など関係なく、互いを思いやり、気持ちよく過ごしていくことの大切さを伝えた。



Fig.1 話し合いの様子

6 まとめ

普段の生活の中において、なかなか仲間同士で確認し合うことの少ない「音」という話題を取り上げたこの取り組みの中で、舎生がどのような音に対して関心を持っているのか、また、「音」というものをどのような認識で捉えているのかを知るよい機会となった。

きこえる立場の人が日常的に気にしたことがないような生活音などに対しても気を遣っている舎生がおり、人によっては、きこえないからこそ音に対して過敏になっている様子が見えられた。

このことから、一口に「音」と言っても、生活上避けることのできない音や、気をつければ極力抑えることのできる音などを紹介し、更に深く掘り下げながら、舎生と一緒に考える必要性は大きい。

「自分はきこえないから」ということであらゆる音に気を遣いながら生きていくことが正しいことではなく、「音」に対する理解を深めた上で、場面に応じた行動の使い分けをすることが大切であることを舎生には知ってもらいたい。それが「音」に対するマナーにもつながってくると考える。舎生の「音」

へ対する認識や感じ方の変化を敏感に捉えながら時代に即した指導方法の検討も絶えず行っていきたい。

また、「音」についての指導の中での声かけに限定せず、様々な角度から情報を投げかけて、生活指導のあらゆる領域や事柄に関連づけた取り組みをしたい。そのためには、指導員も「きこえない」とはどのようなことなのかという点に対する理解を深めることが不可欠である。

【参考文献】

- 1) 「東京教育大学教育学部附属聾学校要覧 幼児・児童・生徒に関する調」(昭和 47 年度-昭和 52 年度)
- 2) 「筑波大学附属聾学校要覧 幼児・児童・生徒に関する一覧」(昭和 53 年度-昭和 60 年度)
- 3) 寄宿舎 平成 10 年(1998 年)「寄宿舎における生活目標指導-平成 8 年度「自立的な生活態度を育てる」-」筑波大学附属聾学校紀要第 20 巻(通巻 25 巻)123-125
- 4) 寄宿舎 平成 19 年(2007 年)「寄宿舎個別生活目標支援計画について」筑波大学附属聾学校紀要第 29 巻(通巻 34 巻)139-142
- 5) 木村美津子・加藤真弓 平成 26 年(2014 年)「あらゆる場面に応じた力を身につけるために～卒業後、一人で生活することを想定して～」筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要第 36 巻(通巻 41 巻)80-86